

16 世紀の都市におけるキリシタン女性

—— 日比屋モニカと細川ガラシャ ——

小西 瑞 恵

要旨

ここで取り上げるのは、日本の 16 世紀から 17 世紀におけるキリスト教徒の女性たちで、彼女らがどのような社会状況におかれ、どのように人生を全うしたのかという歴史的事実を検討することが本稿の目的である。畿内とその周辺地域を中心に、都市のキリシタン女性の実像を検討した。一例は堺の日比屋了桂の娘モニカであり、もう一例は明智光秀の娘玉（細川ガラシャ）である。日比屋モニカは貿易商人・豪商で堺のキリシタンの中心人物である父了桂のもとで育った敬虔なキリシタンであったが、その婚約は彼女の意に染まぬものであったため、宣教師に相談して結婚を拒否しようとした。彼女の結婚と死は、都市堺で精一杯意志的に生きようとしたキリシタン女性の生涯の実例である。また、細川ガラシャは明智光秀の娘玉で、細川忠興夫人である。彼女が謀反人の娘として社会的に孤立するなかでキリスト教に帰依するまでのいきさつを、従来の説のように高山右近の影響から考えるだけではなく、侍女清原マリアとの強い結びつきから明らかにした。彼女が死ぬまでの劇的な生涯は、当時の日本社会で自立的に生きぬこうとした女性の典型的な例である。最近の研究により、ガラシャがヨーロッパにまで聞こえた有名な存在であったという事実についても述べた。

はじめに

1549 年 8 月 15 日（天文 18 年 7 月 22 日）、フランシスコ・ザビエルが日本人アンジロウ（パウロ）の案内で鹿児島に上陸し、9 月 29 日には伊集院で領主島津貴久に会って宣教の許可を得た。これ以後、日本でキリスト教の布教が始まったのである¹。ザビエル以後、日本各地の都市を拠点にした伝道を通じて、キリスト教徒は次第に増加し、宣教師達が布教した地域も、九州地方から全国に拡大していった。1550 年の 7 月と 8 月の 2 回、ザビエルは鹿児島から平戸へ出発、領主松浦隆信に歓迎され、宣教の許可を得た。10 月末に都に向けて平戸を出発し、海路博多、陸路黒崎、関門海峡・下関を経て 11 月初旬に山口に着いた。街頭で説教し、領主大内義隆と会見を許されている。12 月 17 日には都へ出発し、瀬戸内海の便船に乗ってザビエルが堺港に着いたのは、1551 年 1 月中旬だった²。堺の町でクドウ（クンド）という商人の屋敷に客人として迎えられたが、この人物の息子は、後に堺のキリシタンの中心となる有名な豪商・貿易商人日比屋了桂である³。都市堺と宣教師たちとの交流は、このようにして始まった。

イエズス会が把握した人数によると、1598（慶長 3）年に日本のキリシタンは 30 万人に及んだ

という。この数字の信憑性はともかく、急激にキリシタンが増加していった事実を示す資料として参考になる。キリスト教伝道の過程で、宣教師たちは決して順境にあったわけではない。異国人と異教に対する一般の日本人の差別・反発や迫害は、最初から多かった。しかし、織田信長が宣教師たちに好意的であった例が示すように、一部の日本人は積極的にこれを受容した。事態が大きく変わるのは、1587年（天正15）に秀吉がバテレン追放令を發布してからで、1596年（慶長1）の長崎における26聖人殉教にみるように、キリシタンに対する厳しい弾圧と迫害の歴史が始まる。

1 堺と日比屋モニカ

堺と日比屋了桂

中世の国際的な港湾都市堺について、イエズス会の宣教師ガスパル・ヴィレラが「堺は日本のベニスである。」と述べた記録は、日本史の教科書にも掲載され、よく知られている。ヴィレラが堺を訪れたのは、ザビエルの遺志を継いだものであった。ルイス・フロイスの『日本史』によれば、トルレス神父⁴とヴィレラ神父が日本人教徒2人と都の比叡山に向かったのは、1559年（永禄2）である。彼らは大友義鎮（宗麟）の領国豊後府内（大分県大分市）から堺まで船に乗って来たのだが、豊後から乗り合わせた堺生まれの教養ある婦人が、室津から堺に至るまでのあいだに彼らの教えを受けてキリスト教徒になった。同船中の日本人たちは彼女の意志を捨てさせようと努力したが、それに失敗すると、彼女が宣教師と結婚すると言いがかりを浴びせたうえ、一行に飲み水も与えずに色々苦しめたという。当時の一般の日本人の反応とはそのようなものであった。豊後から44日を経て堺に上陸した一行を、かの婦人（洗礼名ウルスラ）は義兄弟の海岸縁の貧しい家に連れて行った。また、堺を見物中に偶然山口から来た教徒と出会い、彼の案内で別の家でいっそう手厚いもてなしを受け、数人に説教をおこなったが、目的は比叡山にあったため、堺には3日しか留まらなかったという。しかし、この際、ヴィレラ神父は実力者三好長慶や松永久秀と親交を結び、1559年12月中旬頃仏僧永源庵のとりなして妙覚寺に第13代將軍足利義輝を訪問した。翌1560年（永禄3）には、再び將軍義輝との謁見がかなえられ、夏頃には、布教の許可も得ることができたが、それは幕府政所執事伊勢貞孝の尽力によるもので、大友義鎮（宗麟）が親しい伊勢貞孝にヴィレラ神父を紹介して庇護を頼んだことによるものであった。これは『フロイス 日本史』（第3巻、82頁）に記された3カ条の制札で、『室町家御内書案』に収められたキリシタン国僧伴阿天連を保護する禁制のことである⁵。

ヴィレラ神父が再び堺を訪問するのは、1561年（永禄4）から翌年にかけてであり、この時は日向殿⁶の紹介で日比屋了桂の櫛屋町の家に滞在している。日比屋了桂の子としては、モニカ・サピナ・アガタの3人の娘と一番幼くてヴィレラ神父に13歳の時洗礼を受けたというヴィセンテ了荷がいた。次のヴィレラ神父の堺訪問は、1563年（永禄6）年と1565年（永禄8）で、いずれも日比屋了桂の許にかくまわれ、保護を受けた。了桂は商人なので、中国船が入港する^{しも}下（九州）地方に行かなければならなかったから、了桂の留守中は多少心配であったという。日比屋了桂が洗礼を受け、ディオゴ（了五）を名乗るのは、1564年（永禄7）である。翌1565年（永禄8）、

フロイスとルイス・デ・アルメイダは豊後から40日間かけて堺に着いたが、堺に着く前の晩に彼らは堺が焼けるのを見た。この火災で焼けた家は約1000戸であった。港が嵐だったので、了桂が大きいボートを出して迎えてくれた。彼らはまっすぐ彼の家に向かい、非常に美しく新しい家（別荘、離座敷）に宿泊したが、了桂の妻や息子・娘たち家族も親切にもてなした。アルメイダは都に出発するつもりであったが、旅の疲労と寒さのため急病で倒れた。しかし、ディオゴ了桂がキリシタンの医師を呼んで25日間も看病したため、ようやく回復したのである。

モニカの結婚と死

このディオゴ了桂の長女がモニカである。日比屋モニカについては、早くに岡田章雄が「堺の聖女」を著して詳しく紹介している。残念ながら、典拠とされた史料が注記されていない⁷が、今ではルイス・フロイス『日本史』第3巻（五畿内編I、262～266頁）が参照できる。アルメイダが療養の日々を送っていると、ある日16歳のモニカが侍女1人を連れて来て、アルメイダに次のように告白した。父了桂が母の弟（モニカの叔父）と結婚させようとしているが、彼女は結婚を避けるため髪をおろそうと決意したというのである。了桂の妻は堺の商人茜屋の出身で、熱烈な一向宗の信者であった。モニカはアルメイダが父を説得するよう頼みに来たのである。

アルメイダは、次の日了桂に会ってモニカの気持ちを伝え、この2人の結婚は思いとどまった方がいいと説得した。まず相手は一向宗の信者であり、また叔父と姪の間柄であることも感心できない。次にモニカ自身に結婚の意志がないのに、ただ親同士が決めたことだからというだけの理由で強制することは慎まなくてはならない。これに対して了桂は、以下のように答えた。2人は幼なじみで兄妹のように暮らしていたこともあるので親同士で許嫁に決めたが、それは一般の慣習にならただけである。相手は妻の実家茜屋の後継ぎで、しきりに先方が輿入れを急ぐので、相手の宗札が将来キリシタンになることもあろうかとも思い、つい承諾を与えたが、このような結婚が神の教えに背くことになるのなら、相手は面目を失い、自分は約束を破るというつらい立場に陥るが、あえて婚約を破棄する。このように、日比屋了桂の決断によって、モニカの自由な意志と信仰は守られたのである。

ところでこの宗札については、これまでに種々検討されてきたが、永禄7年（1564）2月21日に天王寺屋津田宗及が堺の町の有力者を招いて開いた茶会（「助五郎町振舞」）に、出席した「宗札」であることが間違いないから、この頃から堺の有力者であった。

アルメイダを堺に残して上京したフロイスは、ヴィレラをはじめ多くの信者の歓迎を受けていた。それから2週間ほどして、フロイスとヴィレラは輿を連ねて將軍足利義輝の許を訪れて年賀の挨拶を述べ、大きなガラスの鏡や南蛮帽子、琥珀や麝香、竹の杖などを進物として贈った。しかし、これから数ヵ月後の1565年6月17日（永禄8年5月19日）、松永久秀・三好義継等の陰謀のため將軍義輝は殺され、武衛陣御所は灰燼に帰し、京都の町は大混乱に陥った。さらに三好三人衆と松永久秀の対立から戦乱は摂河泉に波及していった。保守勢力の策謀によって、1565年7月31日（永禄8年7月5日）におごまぢ正親町天皇の朝廷から「だいうす追払」（宣教師の都からの追放）が布告されたため、フロイスとヴィレラは堺に逃れた。今度も了桂は宣教師達を保護したが、

自邸と同じ町筋の五軒ほど隔てた先にある家の裏手の狭苦しい納屋を、月 2 クルザード⁸の約束で借り入れた。窓がないので昼間でも暗く、雨漏りがひどく、湿気のために臭気が満ちて、ねずみが暴れ回るといっても住むに堪えないような場所だったため、2 人の神父はたちまち病気になって苦しんだが、モニカはここに通ってミサに列し、説教を聞き、告解をおこなった。モニカの母の実家にあたる茜屋もその町筋にあった。

叔父の宗札は彼女をあきらめきれずにいたので、彼女を奪おうと企んだが、了桂はそれに気づいて茜屋の前を通らなくてもすむように、モニカを屋敷の横手にある小さな門から神父達のいる納屋に通うようにした。ところが、ある朝、手違いからこの門が開かなかったので、モニカが数人の侍女とともに表通りに出て茜屋の前を通りかかったところ、待ち構えていた数人の若い男達がモニカを捕らえて家の奥座敷に連れ込み監禁してしまった。堺の町は一種触発の緊張に包まれた。了桂は力づくで娘を奪い返そうとしたが、上手くいかなかったため、宗札の父ソーセイ（奈良屋宗井）を人質にとって交渉の手段にした。10 日ほどモニカは宗札に監禁されていたが、どのような脅迫にも屈せず、いざとなれば死を選ぶ覚悟を示していた。両家のあいだで協議が重ねられ、宗札をキリシタンに改宗させて、2 人を結婚させるのがいいという結論に達した。そのように両家のあいだで和解が成立したため、宗札はモニカを両親のもとに送り届け、宗井も無事解放され、宗札はほどなく洗礼を受けてルカスの霊名をもらい、モニカとルカスは神の前で正式に結婚した。このような経緯があったとはいえ、夫婦は仲睦まじく 6~7 年のあいだに娘と息子を授かった。この間、1568 年（永禄 11）には織田信長が足利義昭を奉じて上洛し、堺を直轄地としていた。出産がモニカの体力を奪い、産褥熱のためか彼女は死の床についた。彼女は異教徒である母からの食事を拒んだため、母もキリシタンに改宗しイネスと名乗った⁹。モニカが死んだのは 1577 年（天正 5）で、母の改宗の 20 日ほど後であったという（『日本史』第 4 巻、五畿内篇Ⅱ、21~29 頁）。

その後の日比屋了桂一族

このルカス宗札は、1586 年（天正 14）11 月 22 日、大坂で磔刑に処せられた。この事件については、J・L・Alvarez・Taladriz「堺の日比屋家に関する 1586 年の新史料」が詳しく述べている¹⁰。同年 6 月頃日比屋了桂の弟ガスパールが兄弟や親族達を招いて行った茶会の後、ディオゴ了桂の弟トーアンが、ルカス宗札の弟リョーカンに刺し殺された。ガスパールは兄トーアンの死を見て声を立て、リョーカンを取り押さえようとしたが、逆に殺されてしまった。この騒動にガスパールの下僕達が駆けつけて下手人リョーカンに傷を負わせたが、リョーカンは素早く自死してしまった。あまりのことに、同席していたルカス宗札と隣人道察¹¹は悲嘆に暮れて自宅に戻った。

当時堺は関白秀吉の直轄地で、支配する政所代官はジョーチン小西立佐と石田三成であった。石田三成は、亡くなった了桂の弟 2 人（トーアンとガスパール）と下手人リョーカンの親族を捕縛し、同時にルカス宗札と隣人道察を逮捕して、財産を没収してしまった。道察と故人 3 人の妻達は、堺の政所と役人達に多額の身代金を払い助命嘆願を始めた。一方、ルカス宗札は殺人犯リョーカンの兄というだけで、自らも妻も 4 人の子供達も捕縛され、堺から大坂へ連行された。日

比屋了桂は2人の弟を失い、娘婿宗札は捕らえられ、娘サビナ¹²と4人の孫は死を宣告されるという突然の不幸に見舞われた。彼は妻イネスを堺に残し、四男ヴィセンテおよび他の家族と大坂に赴き、イエズス会の教会に身を寄せた。オルガンチーノ神父と明石の領主ジュスト高山右近達がルカス達を救うために奔走した。たまたま、ジュスト右近が秀吉とその茶の湯の師匠千宗易を自宅に招いたので、その茶会の席上で、右近と宗易はルカスに罪が無いことを秀吉に述べた。これを聞いた秀吉は悩んで、2人にその話をするなど命じたという。ちょうど大坂に来た徳川家康の使者（1586年6月30日、家康から秀吉の妹旭姫との結婚を報告するために派遣された榊原康政）も、茶の師匠である宗易とこの問題の解決に尽力したが、うまくいかなかった。使者はまた秀吉の妻の北政所にも話したが、彼女は問題が難しいとみて口を出さなかった。

アグスチーノ弥九郎¹³（小西弥九郎行長、小西立佐の子息）は、3カ国の領主で秀吉の養女（前田利家の四女、秀吉の側室加賀殿まあ姫の妹）と結婚している八郎（備前・備中・美作国の領主宇喜多秀家）殿の乳母のところへ話しに行った。乳母は秀吉に道理を説き、関白はルカスの家族の命を助けることにした。堺政所が用意し、大坂に運ばれた十字架は六つだったが、ルカスだけが処刑されたのである。1986年11月22日にルカスが処刑された午後、ルカスの家族は日比屋了桂に引き渡された。これは北政所と宇喜多秀家夫人の粘り強い交渉が功を奏したからである。小島屋道察は茶会用の名品2点を持っていたが、秀吉に両方とも取り上げられた。ルカス宗札が父奈良屋宗井から遺された8000クルザード以上の価値があるという茶会用の玉礪の水墨画「枯木」も、秀吉のものとなった。1593年7月7日、肥前名護屋で秀吉が中国の使節を招いた茶会で、この「枯木」が使用されている。

ルカス宗札の長男アグスチンは、叔父のヴィンセンテ了荷とともに朝鮮の役に加わり、戦死した。了桂については、1600年（慶長5）まで消息が分かるが、以後一族は衰亡していったと思われる。

2 大坂と細川ガラシャ

明智光秀と娘玉

細川ガラシャは16世紀の畿内キリシタンの代表的な人物で、高山右近と並び称せられる象徴的存在である¹⁴。明智光秀の三女玉が織田信長の媒酌により、細川藤孝の長男忠興と結婚したのは、1578年（天正6）であった。婚礼は細川氏の居城山城勝竜寺城（京都府長岡京市）で執り行われ、ここが新居になった。16歳で結ばれた2人の新婚生活は、翌年には長女お長^{ちやう}が誕生し、その翌年には長男忠隆が誕生するという順調なすべり出で、1580年に藤孝が信長に丹後領主を任じられると、忠興と玉夫妻も丹後宮津城（京都府宮津市）に住むことになった。

史上あまりにも有名な本能寺の変が起こったのは、1582年6月21日（天正10年6月2日）早朝で、明智光秀が京都本能寺に主君信長を急襲し、信長は自死した。また、二条御所にいた信長の長男信忠も攻撃されて自死した。ここでは、本能寺の変についての詳しい経過や、なぜ光秀が反乱を起こしたのかという理由について、問わないことにする。乱後、光秀は居城坂本城に入り、5日には安土城に入った。朝廷は光秀に対して吉田兼見を勅使として派遣し、7日には安土城で光

秀と対面して進物や巻子を贈っている。光秀は朝廷や寺社に銀子を贈り、9日には入京して細川藤孝・忠興父子に書状で味方に付くよう促したが、親友藤孝は信長の喪に服して動かず、忠興に家督を譲って出家してしまった。光秀は味方を得られず、備中高松城（岡山市）を水攻めして毛利軍と対峙していた羽柴秀吉が急いで帰って来るといふ、いわゆる「中国大返し」によって、予想外の不利な立場に置かれることになった。秀吉は天正10年6月7日には姫路城に入り、味方となる勢力を増やしていった。13日には天王山の元で山崎の合戦が行われ、敗れた光秀は翌日小栗栖おぐるす（京都市伏見区）で土民に殺された。謀反人の娘玉を、細川忠興は山深い味土野みどのの地（京丹後市弥栄町）に送って幽閉した。

細川ガラシャと清原マリア

玉の幽閉は2年に及んだが、秀吉に許されて忠興と復縁し、大坂玉造の細川屋敷（大阪市中央区）に移った。以後、彼女は同地で亡くなるまでの16年間、ほとんど外出しなかったという。夫忠興から外出することを禁じられていたのである。彼女は夫との間に3男3女をもうけたが、史料の語るところによると、夫婦関係は円満とは言いがたい複雑な様相を示している。明智光秀の娘という境遇が彼女の立場を孤立させたことは当然であるが、光秀の盟友・親友ともいえる舅藤孝が父光秀を見捨てたことや、彼女が味土野に幽閉されている間に忠興が側室をめとったことも、彼女の自尊心を傷つけたと思われる。父の謀反のためとはいえ、玉は両親や姉夫婦（長姉と義兄明智秀満）等親族を失い¹⁵、生き残ったのである。彼女はしだいに信仰に心の平安を求めていくことになるが、信仰のきっかけとなったのは、忠興の友人で摂津高槻城主のキリシタン大名高山右近であった。夫から聞くキリスト教の教義に関心を持ち、忠興が秀吉に従って九州に出陣中の1587年（天正15）に大坂天満にあったイエズス会の教会を訪れた。この時はお忍びで身分を明かすことができなかつたため、セスペデス神父から洗礼を受けることはできなかつた。イエズス会士達は、彼女を秀吉の側室の1人ではないかと怪しみ、あとをつけて、細川家の者であることを知ったという。玉は侍女頭（玉の親友であり、キリスト者の娘である小侍従清原¹⁶）を教会に派遣し、そのマリアから洗礼を受けて、ガラシャとなった。ガラシャという霊名は、神の恩寵という意味である。

この清原マリアについては、歴史的に重要な人物であったことが明らかになっている。彼女は儒学者清原宣賢の孫清原枝賢しげかた（頼賢）の娘で、正親町天皇の後宮女房として伊予局を務めた女性である。彼女が伊予局として後宮に入ったのは、1558年（永禄1年9月26日）である。清原枝賢の父清原良雄（業賢）の姉妹智積院は室町幕府第11代将軍足利義晴の側室である。細川藤孝は1534年（天文3）に三淵晴員の次男として京都東山岡崎（京都市左京区）に誕生したが、母は清原宣賢の娘とされ、この智積院の子息であるという。藤孝には将軍義晴の落胤説さえある。清原マリアが玉に仕えることになったのは、彼女が細川藤孝の従兄弟にあたる清原枝賢の娘で、後宮にも出仕した経験があるという経歴からくるものであった。

立花京子は清原枝賢や吉田兼右（吉田兼見の父）を、潜在キリシタンだったと述べている。確かに、1563年7月6日（永禄6年6月16日）に来日したルイス・フロイスは、ヴィレラ神父か

ら松永久秀の友人結城山城守忠正と大外記清原枝賢、高山飛驒守（高山右近の父）が洗礼を受けたのは、同年の頃であると『日本史』に記している¹⁷。結城忠正の洗礼名はアンリケ、高山飛驒守はダリオである。吉田家は神道の中心にあったが、吉田兼見についても、1569年（永禄12年）に「南蛮水滴」（南蛮渡来のガラス製の水差し）を贈られたことについて小田原の北条氏康からの礼状が現存するから、少なくとも南蛮勢力と親しかった事実は否定できないという。従って、1587年に玉が受洗したのは、1563年に受洗した清原枝賢の娘が侍女頭おいとであったという背景を無視しては考えられない。マリアがいつ洗礼を受けたのか断定できないが、父や高山家の影響もあり、マリアは玉の信仰を導くことになったと考えられる。皮肉にも1587年7月25日（天正15年6月19日）、秀吉は九州征伐の帰途、博多に近い筐崎に滞在中にパテレン追放令を出していた¹⁸。

ガラシャの子供たちについても、詳細に検討されてきた。キリシタンになった子女としては、洗礼を受けた順に、次男興秋・次女多羅・長女お長が知られている。

ガラシャの死と細川家

細川忠興は秀吉のキリシタン追放令後、玉の侍女数人を含む家中のキリシタンを追放した。この年の終わりに、ガラシャがセスペデス神父に宛てた手紙が残っていて、宣教師達は国外退去せよという秀吉の命令にも関わらず、イエズス会士達が日本を離れないと決心したことへの喜びと感謝、みずからの信仰心と殉教の覚悟を述べている。ガラシャはイエズス会士との日本語の書簡にラテン文字（ローマ字）を使い、キリスト教や異文化を学んだ。

細川ガラシャの死は、意外に早く訪れた。秀吉は1598年（慶長3）に亡くなったが、1593年（文禄2）に生まれた秀頼はまだ幼かったので、徳川家康・前田利家・毛利輝元・上杉景勝・宇喜多秀家の五大老と石田三成以下の五奉行に豊臣家の運命を託した。その石田三成と徳川家康が争うことになった。1600年（慶長5）、細川忠興が家康に従い東北の上杉景勝征伐のため出陣中に、石田三成が大坂に居住する大名の妻子を、大坂城内に人質にとろうと計画した。三成が最初に人質にとろうとしたのが、大坂城南の玉造の細川屋敷にいた細川ガラシャであった。彼女は三成側の軍勢に屋敷を囲まれると、長男忠隆の妻（前田利家の次女）や侍女達を逃がし、みずからは細川家の家老小笠原少斎秀清の手にかかって潔く死を迎えた。小笠原少斎以下の家臣達が火を放って切腹し、細川屋敷は炎上したため、三成側の軍勢は空しく退き、この人質計画は失敗した。ガラシャの死については、『細川家記』や生き残った侍女が後に証言した「霜女覚書」が残されている¹⁹。かつて細川屋敷があった敷地は、現在は公園となり、その一面にカトリック玉造教会が建っている。この教会入口前には、高山右近と細川ガラシャの石像が飾られ、大聖堂内部正面の壁全面に、堂本印象画伯が描いた「栄光の聖母マリア」が掛けられている。その聖母マリアの足もとに描きこまれているのが、高山右近と白百合を捧げ持つガラシャである。また、ガラシャが細川屋敷で死を迎える場面を描いた絵も掲げられている。

細川屋敷の跡としては、井戸が残されているだけである。そこには、「越中井」という題字と、「散りぬべき時知りてこそ世の中の 花も人なれ人も人なれ」というガラシャの辞世の句を刻んだ徳富蘇峰による碑が建っている。ガラシャの遺骨は、オルガンチーノ神父が堺のキリシタン墓

地に葬ったというが、大坂に帰った細川忠興は、ガラシャのために盛大なキリシタンの葬儀を行って、崇禅寺（大阪市東淀川区）に改葬した。法名は秀林院である。ガラシャと忠興との間に生まれた6人の子の内、次女多羅は大分県臼杵市の臼杵城主稲葉一通と結婚し、長女お長も兵庫県豊岡市の但馬出石城主前野和泉守長重の後妻になり、生涯信仰を守ったようである。三女お万はガラシャが死ぬ2年前に生まれており、洗礼は受けていなかったと思われる。彼女は1615年（元和1）に公卿中納言鳥丸光賢に嫁いだ。長男忠隆はキリシタンではなかったようであるが、妻がガラシャの勧めとはいえ、隣の宇喜多秀家（夫人は妹であった）の屋敷に逃げため、忠興からとがめられて廢嫡の処分を受けた。次男興秋は洗礼を受けていたため家を継げず消息を絶った。のちに豊臣秀頼に仕え、大坂夏の陣でも勇敢に戦って生き残ったが、父忠興は興秋を許さなかった。興秋は自死を拒んだため殺されたという。細川家の嫡子となったのは三男の忠利であった。この忠利が生まれたのは、1586年（天正14）で、忠興は1604年（慶長9）には彼を後継者に定めている。忠利は將軍秀忠の養女千代姫と結婚した。忠興と忠利はガラシャの影響か、宣教師やキリシタンには好意的であった²⁰が、1618年（元和4）以後は弾圧政策に転じている。

3 女性史からみたガラシャとモニカ

1549年（天文18）のフランシスコ・ザビエルの日本布教から、1638年（寛永15）の宣教師追放までの約1世紀間を、日本キリスト教史では、「キリシタン世紀」と呼んでいる。本稿で取り上げたモニカとガラシャは、いわゆるキリシタン世紀における代表的なキリシタン女性である。特にガラシャ夫人は、1588年にルイス・フロイスの書簡が彼女の信仰について記し、1590年にはドイツ語に訳されていたという。ガラシャは同時代に宣教師たちによってヨーロッパに伝えられ、17世紀のヨーロッパでガラシャの名はよく知られていたが、その後忘れられた。最近明らかにされた事実によれば、1698年にウィーンのイエズス会の劇場は、ガラシャに関するオペラを上演し、オーストリアのハプスブルグ王朝の皇帝レオポルド1世は、家族や客達と共に劇を楽しんだという²¹。

エリザベート・ゴスマンによるガラシャ論は、ヨーロッパと日本という違いがあるにも関わらず、家父長制に基づく男性社会が作り上げた理想的女性像として彼女が描かれてきたことを指摘している。日本人のガラシャ観は、自己犠牲的で夫に貞節な愛情深い良妻賢母型の女性であり、彼女の最期は細川家のために殉じるという政治的配慮に基づいていた²²というが、儒教的イメージに影響された見方である。ヨーロッパ的（キリスト教的）ガラシャ観も、自己犠牲に殉じた信仰深い美德に富む女性像であり、彼女の最期は真理（神）に捧げられたというものである。いずれも人間ガラシャを充分にはとらえきっていない。

エリザベート・ゴスマンが述べているように、ガラシャと同じ時代のヨーロッパには、イタリアの詩人ルクレティア・マリネラ（1571～1653）や、モデラータ・フォンテ（1555～92）等の女性作家がいて、男性による女性観を否定し、独立した人間としての彼女らの体験を証言し、著名な哲学者に対してさえ、彼らの描く否定的女性像を批判している。ガラシャを同時代のヨーロッパの自立的な女性作家と同様にとらえ、苦悩に満ちた人生を意志強く生き抜いた自立心に富む人

間として理解することに賛意を表したい。ガラシヤの強固な自我を示すエピソードは、幾つか示すことができる。本能寺の変後、味土野に護送される際に、細川家のために自害を勧める家臣もいたというが、彼女は決して死を選ばなかった。また、ガラシヤは父光秀に父の反乱を責める書簡を送ったという。一般には、細川家からそのような内容を強制されて書いたとされるが、自分の不幸は父のせいだと考えたのは本心ではないか。『綿考輯録』に載せられた有名なエピソードもある。ある日忠興と玉が食事中に、たまたま庭で木に登って作業していた植木職人が玉の顔を見た。忠興は激怒して職人を斬殺し、その首を玉の脇に置いたが、玉は顔色も変えず食事を続けたという。忠興が呆れて「おまえは蛇か」というと、玉は「罪もない職人を殺すというのは、まさに鬼の仕業でしょう。鬼の女房には蛇がふさわしいでしょう。」と答えたという。この話はガラシヤ悪女説の根拠となっているが、もし事実であるとすれば、忠興が野蛮な一面をもつ専制的な武將で、玉を熱愛するというよりも、嫉妬深く独占欲の強い夫であったことを証明する事実であり、むしろガラシヤの冷静沈着さを評価すべきであろう。

同様に、日比屋モニカについても、家父長制に基づく男性社会が作り上げた理想的女性像という鑄型から外した人間像を検討したい。第一に、日比屋了桂が洗礼を受けたのは、南蛮貿易を営む貿易商人・豪商としての立場からいって、ごく自然な成り行きであった。大航海時代のヨーロッパ諸国の先陣を切ったポルトガルは、イエズス会宣教師の布教を通じて東アジアに進出し、南蛮貿易を展開していったからである²³。モニカについては、詳しく述べたように、本人が望まぬ結婚問題についての悩みをアルメイダに打ち明けていた。父了桂は洗礼を受けたとはいえ、当時の社会慣習に何の疑念も持たず、娘モニカを妻の弟で熱心な一向宗信者である宗札と結婚させようとしていた。彼女の自主的な願いを受けとめて了桂を説得したのはアルメイダであり、ひとまず、彼女の意志は認められたのである。

しかし、宗札はモニカをあきらめきれず、実力行使で彼女を奪い取るという強引きわまりない行動に出た。了桂はいうまでもなく、宗札も堺の指導的な位置にある有力者・豪商であった。その言動は国際的な港湾都市堺の命運を左右しかねないほどの重要性をもっていたはずである。いかにも軽挙妄動というしかない宗札のふるまいであり、この非常識さは、宗札の弟リョーカンにも通じる。モニカの奪取事件が起こったときに、了桂は堺の町に迷惑が及ぶのを恐れて、宗札の受洗とモニカとの結婚という形で解決に導いた。結果的には、モニカの自由な意志は無視されたのである。2人の結婚生活は円満であったとされるが、2子を出産したモニカは病没したから、彼女が満ち足りていたのかどうかは分からない。彼女が母を受洗させたというのが事実ならば、信仰を貫いたのは本当であろう。了桂はモニカの死後、ルカス宗札と次女サビナを結婚させた。しかし、宗札の弟リョーカンが犯した殺人によって、日比屋家は財産を没収され衰亡していったから、結末は悲惨であった。

おわりに

16世紀に生きた都市のキリシタン女性の生涯を考察して、彼女達がどのような社会状況を生き抜こうとしたかを検討してきた。日本とヨーロッパの女性を比較したルイス・フロイスによれば、

当時の日本女性の社会的地位は、ヨーロッパに比べて決して低くなかった²⁴。問題は主要な宗教であった仏教で、^{へんじょうたんにし}変成男子こそ女性が極楽往生できる唯一の道であるという説が浸透していたことにあると考える。女身を転じ、男子に身を変えることによって、はじめて女性は浄土に迎えられるのである。女性であるだけで穢れた存在であるとする露骨な差別的な女性観は、平安時代末に成立した『梁塵秘抄』の歌謡「女人に五つの障りあり 無垢の浄土は疎けれど 蓮華し濁りに開くれば 竜女も仏に成りにけり」が象徴している。その根拠は、『法華経』第12章の^{だいぼだつたほん}提婆達多本で、「五つの障り」のほかに、女身は垢で汚れていて仏になる器ではないと述べられ、次に、理知的な竜女が男子に姿を変えることによって成仏できたという場面が描かれている。また、儒教では、「三従五障」の女性観が定着していった²⁵。近世に支配的となる女訓書の「三従の道」は、女性は幼いときは父に、嫁しては夫に、老いては子（長男）に従えという教えである。

キリスト教における聖母マリア信仰は、女性に純潔と神聖な母性を強いるもので、家父長的な男性社会が理想とする女性像そのものである。その女性像からはみ出る女性には、厳しい差別と偏見が待ち受けていた。しかし、仏教や儒教で露骨になっていった女性差別観に比べれば、理想の女性像を崇拜するキリスト教が男性社会の束縛から逃れる可能性を持つとして受容されても不思議ではない。カトリック社会の一夫一婦制という結婚制度が、一夫多妻制がありふれたものであった日本社会で、自覚的な女性に受け入れられたことも、キリスト教の魅力としてあげられよう。また、ガラシャのような教養ある上流社会の女性にとって、ヨーロッパの進んだ外来文化が大きな魅力となったことは、いくら強調してもしすぎではない。その一方で、都市の下層民の生活の悲惨さも、宣教師達によって具体的に記述されている²⁶。キリスト教の慈善的社会救済事業も、キリスト教が受け入れられる理由となった。このような女性史的視点は、従来の都市史で検討が充分ではなかったと思われるので、今後とも解明を続ける必要がある。

女性史からみたガラシャとモニカの生涯は、今から400年ほど前の日本社会で苦闘した自覚的な都市の女性群像として、現在でも深い興味と感動を与えてくれるのである。

(2008年9月25日成稿)

- ¹ 1549年11月5日、ゴアのイエズス会員にあてた鹿児島からのザビエル書簡（河野純徳訳『聖フランシスコ・ザビエル全書簡』平凡社、1985年）。ザビエルについての事績は、基本的にこれによる。
- ² ザビエルは堺を日本で最も富裕な港であるとし、そこへは日本中の銀や金の大部分が集まってきているから、もしも神の聖旨ならば、物質的に莫大な利益となる商館を設けようと提案している。1549年11月5日、マラッカのドン・ペドロ・ダ・シルヴァにあてた鹿児島よりのザビエル書簡。
- ³ 日比屋了桂一族については、松田毅一『近世初期日本関係 南蛮史料の研究』（風間書房、1967年）の「第五章 代表的キリシタン伝の補足的的研究」第二節の「日比屋了桂一族」が詳しい。了桂の父は、クドウヤクンドではなく、福田とされる。なお、初出は註13の論文である。
- ⁴ 「神父」は“Padre”の訳語である。松田毅一・川崎桃太訳『フロイス 日本史』（全12巻、中央公論社、1977年）の凡例五にあるように、「司祭」もしくは「伴天連」をあてるという考え方もあるが、一般的な「神父」を使用する。
- ⁵ 松田毅一『近世初期日本関係南蛮史料の研究』（風間書房、1967年）396～403頁、参照。
- ⁶ この日向殿は、『天王寺屋会記』永禄7年（1564）8月14日・23日にみえる「日向」・「宮王日向」の可能性が高い。日向は大小路町南北老若との茶会に出席しており、堺の有力者と思われる。『茶道古典全集』第7巻（淡交新社、1959年）所収。
- ⁷ 岡田章雄「堺の聖女」は、高柳光寿博士頌寿記念会編『戦乱と人物』（吉川弘文館、1968年）所収。これより前に、助野健太郎「堺の切支丹日比屋了慶とその家族」、『日本歴史』第59号、1953年（昭和28）4月号（54～57頁）がある。
- ⁸ クルザードはポルトガルの金貨で、日本の銀10匁という。フロイスは43クルザードが天正黄金1枚としている。松田毅一前掲書569頁、註5参照。
- ⁹ 岡田章雄は、ルイス・フロイスの『日本史』にそう記されるが、このエピソードには作為がうかがわれるとしている。註7参照。
- ¹⁰ 『キリシタン研究』第8輯（キリシタン文化研究会編、吉川弘文館、1963年）所収。
- ¹¹ 小島屋道察については、『天王寺屋会記』1564年（永禄7年8月14日）に、念仏寺で道察が茶会を開き、「大小路町 南北老若并日向」が出席している。堺の有力者で茶人として知られていた。
- ¹² 日比屋了桂の娘サビナは、モニカの妹で、姉亡が亡くなった後、義兄宗礼と結婚した。
- ¹³ 小西アグスチーノ行長の兄小西清兵衛ベント如清は、日比屋了桂の娘アガタと結婚していた。松田毅一「小西立佐・日比屋了桂一族に就いて」（『日本歴史』127号、87頁、1959年）参照。また、小西ベント如清とアガタとの間に生まれた娘マルタは、キリシタン大名有馬プロタジオ晴信の長男ミゲル直純と結婚したが、のちに直純が棄教した際に離婚した。有馬直純が再婚したのは、徳川家康の養女で曾孫国姫である。小西瑞恵「埋もれた十字架—天正遣欧使節と黄金の十字架—」（『大阪樟蔭女子大学論集』第44号、2007年3月）参照。
- ¹⁴ 細川ガラシャについての書籍や論文は多いが、上総英郎編『細川ガラシャのすべて』（新人物往来社、1994年）が参考になる。ガラシャの信仰を示す書簡は、外国語で伝わっているため、より厳密な史料批判を経ているという意味で、ヨハネス・ラウレス「細川家のキリシタン」（『キリシタン研究』第4輯、1957年）や、エリザベート・ゴスマン「キリスト教と女性—ヨーロッパの視点と日本の視点—」の「Iガラシャ細

川玉の実像と虚像』（『女と男の時空 日本女性史再考 III 女と男の乱—中世—』、藤原書店、1996年）が重要である。

- 15 1582年11月5日（天正10年10月3日）のルイス・フロイスの書簡によれば、坂本城落城の際、明智の2子はその所で死んだという。系図が信用できないので、光秀の息子はこの2人と考えられる。『津田宗及茶湯日記』の天正9年4月12日に、長岡与一郎（細川忠興）が振舞いをした時の人数の中に、「惟任日向守殿父子三人」とあるのが、これを実証する。高柳光寿『明智光秀』（吉川弘文館、1958年）263～285頁、参照。また、『茶道古典全集』第7巻参照。
- 16 エリザベート・ゴスマン「ガラシャ細川玉の実像と虚像」、註14の前掲書126頁、参照。
- 17 立花京子「信長と十字架」87頁参照。修道士ファン・フェルナンデスの1564年10月9日付の平戸発信の書簡にも、忠正と枝賢が洗礼を受けたことが記されている。
- 18 秀吉の伴天連追放令については、平戸市の松浦史料博物館に五カ条の写しが存在する。それによると、日本は神国だからキリシタン国より邪法を授けるべきでないとして、20日以内に伴天連は帰国するよう命じている。ただし、黒船（商売船）の儀は別で、仏法を妨げない輩については、商人はもちろん誰でもキリシタン国から往還するのは構わないとしている。
- 19 『細川家記』は『綿考輯録』として刊行されている。「霜女覚書」はガラシャの侍女霜が、1648年（慶安1）に書いた記録である。自筆本は細川家にあり、『細川家記』に写しを納める。
- 20 細川藤孝（幽斎）の妻は沼田兼光の娘で、須磨の方といい1618年（元和4）に77歳で亡くなったが、霊名をドンナ・マリアという。また、忠興の弟興元も高山右近の感化で、1595年に洗礼を受けた。細川家はキリシタンとの関わりが深いが、本稿では必要な範囲で取り上げた。
- 21 エリザベート・ゴスマン「ガラシャ細川玉の実像と虚像」による。註14参照。
- 22 田端泰子「戦国期の「家」と女性—細川ガラシャの役割—」、京都橘女子大学女性歴史文化研究所編『京都の女性史』、思文閣出版、2002年。
- 23 当時ポルトガル国王は日本に宣教師を派遣し、その生活費を支出することが義務になっていた。宣教師達は南蛮船に乗って来日し、南蛮船も日本の事情に詳しい宣教師のいるところに入港した。松田毅一前掲書569頁参照。
- 24 日本の夫婦別財についての記述がある。一方、ヨーロッパでは、女性はどこでも望みの教会に入っていくことができるが、日本の異教の女性は、いくつかの女人禁制の寺院には入ることができないとあるのは、高野山、比叡山等のことか。松田毅一/E・ヨリッセン『フロイスの日本覚書—日本とヨーロッパの風習の違い—』（中公新書707、1983年）、ルイス・フロイス著/岡田章雄訳注『ヨーロッパ文化と日本文化』（岩波文庫青459-1、1991年）。
- 25 総合女性史研究会編『史料にみる日本女性のあゆみ』（吉川弘文館、2000年）68～71頁参照。
- 26 都市史ではないが、三浦圭一「下剋上の時代の一側面—嬰兒殺害・一色田・散所—」が、フロイスにより都市問題について論じる。『中世民衆生活史の研究』所収、思文閣出版、1981年。